

平成28年4月1日

各都道府県協会理事長 殿
各ブロック協会理事長 殿
各連盟理事長 殿
関係各位 殿

(公財)日本ハンドボール協会
競技本部長 江成 元伸

競技運営に関する通知(平成28年4月1日実施)

平成28年度、公益財団法人日本ハンドボール協会(以下、本協会という。)主催の各大会、競技を実施するに際し、下記の事項について改正または競技運営の趣旨の徹底を図るよう関係者に連絡をお願いします。

平成27(2015)年1月に開催された国際ハンドボール連盟(以下、IHFという。)主催の男子世界選手権、平成27(2015)年12月に開催された同女子世界選手権の実施状況からの情報を参考に、早期に「国際基準」に到達するよう改善すべきところは早急に着手すべきとの考え方で進める。オリンピック、世界選手権で設営している施設、設備および運営方法は可能な限り取り入れていくこととするが、開催体育館の施設、設備によって現実的に対応できない点多々あり、経済的負担も考慮し対応していくこととする。

本協会の主催大会である日本選手権は、下記に示す内容で管理・運営する。本協会共催大会、加盟団体の主催大会もこの「国際基準」に併せて管理・運営されることが望ましい。

なお、平成28年7月1日、IHFは競技規則改正を予定している。本協会としては平成28年度早々から、新競技規則を取り入れられる環境にあれば適用していただくようご案内していることから、一部変更についても記載する。なお、IHFから正式な競技規則書が送付された段階で、改めて競技運営に関する通知を発表する。

記

1 本協会が主催する大会は、本協会競技本部の責任の下、大会競技委員会を編成し、競技運営部役員、審判部役員が管理・運営にあたる。

2 本協会の主催する大会の各試合は、本協会が指名する日本協会オフィシャル(以下、JHAオフィシャルという。)本協会が指名するタイムキーパー、スコアラー(従来は総称してテクニカル・デレゲート(以下、TDという。))と呼称していた。)および主管団体が指名する補助員(タイムキーパー、スコアラーの補助)で管理運営にあたる。

3 I H F は記録席をジャッジズテーブルと表記していることは昨年度に示しているところである。選手をプレーヤー、審判員をレフェリー、競技場をコートというように、日本語、カタカナ読みと区別していることと同様に扱う。

コートフロアより少なくとも 10cm 以上一段高くして設置する記録席には、両端に T D としてのタイムキーパー、スコアラーが着席し業務を行う。その間の中央部に補助員が着席し、記録用紙の作成、得点、退場者表示等の各種業務補助にあたる。

4 記録席後方にさらに一段高くした J H A オフィシャル席を設置する。本協会は過去にマッチバイザー席を設置していたが、国際基準としてこの設置方法とする。なお、会場の広さにより、J H A オフィシャル席が観客席に入り込むことはあり得る。世界選手権では予選はこの方式で運営されていた。ただし、過去には I H F オフィシャルがコートから見て記録席の左側に座り、その横にタイムキーパー、逆側にスコアラーが座っていたこともあった。

男女両世界選手権では、I H F オフィシャル席にビデオモニターおよび得点を確認するゴール内監視モニターが設置されていた。日本選手権は最終日ではあるが、テレビ放映があることからこの運営方法を取り入れることを検討している。

5 記録席、J H A オフィシャル席の後方に、可能であればさらに一段高くした大会競技役員席を設置する。この席には競技役員としての他 J A H オフィシャル、T D、試合分析班、主管団体競技役員が座ることとする。一段高くすることができなければこのレイアウトに従いテーブルおよび席を配置する。

6 公式記録用紙を改正する。従来の公式記録用紙（ランニングスコア）は試合の流れしか対応できないが分析の一部及び広報用として継続して使用する。原則として記録席の少人数対応を意図していることから、後方の競技役員席もしくはその他の席で記録をとる。広報関係者及び観客へのサービスとしての配布は公式記録用紙及びランニングスコアとする。

7 ゴールは本協会仕様のままとする。両世界選手権ではゴールのバーの下部にカメラを設置し、ゴールラインを超すか超さないかの微妙な得点の確認を実施していた。ただし、女子の世界選手権でビデオで確認したにもかかわらず判定に誤りがあったことから、その後は取り外された。国内での実施は機器の開発が伴うことから今後の検討課題となる。

8 ネットは本協会が検定しているネット、キャッチネットと同様の設営をしている。キャッチネットは従来通り上部をワイヤーもしくはロープでネットに巻き付ける方法をとる。キャッチネットのつり下げ方法は競技本部が指示している方式（キャッチネットがゴールのバーと可能な限り平行になるように取り付ける。）が適切と判断でき、国内方式は国際基準を上回っていると判断する。ボールがキャッチネットに絡みつ়原因の多くはキャッチネットがコート床に接着していることによることが原因としてあげられる。キャッ

チネットの長さについては、試合開始前に調整しなければならない。

9 交代地域に置く選手用の座席はベンチもしくはイスを用いる。数は16名分とする。可能であれば連結イスが望ましい。交代地域ラインからセンターライン方向に2席分設置することは従来通りである。最終のイスから約1mのところに交代地域の最遠端を示すラインを引く。おおむね7mラインの延長線上とし、ここまでが交代地域とする。最終イス、ベンチの外側での作業を可能とする。サイドラインと交わることなく、サイドラインから50cm離し、80cm～100cmの長さとし、ラインの色はサイドラインと色を変える。

10 松ヤニボックスは女子の世界選手権では本協会が使用している形態のボックスが使用されており、国内使用と変わっている点として、松ヤニを置く台の下にゴミ箱が設置されていた。国内で市販のボックスが用意できないときには参考にしたい。また、男子の世界選手権では松ヤニを置く台だけで、細い棒状のスタイリッシュな松ヤニ置き台であった。使用されていた松ヤニボックスに広告は掲出されていない。

11 両世界選手権ではタイマー、得点、退場者表示に関する装置として、観客から見やすい表示装置として天井からつり下げられたオーロラビジョンタイプを使用していた。女子の世界選手権の表示はプレーの再生、得点、退場者表示、チームタイムアウトの秒数および回数の表示をしていた。国内の実施状況からこの装置を標準装備とするには時間が必要であると考え。今後、2019年に熊本で開催される女子世界選手権、2020年の東京オリンピックでは必須の設備となる。

なお、男子の世界選手権では出場選手のリスト表示、その選手の得点表示、退場表示が表示板として掲出され、これらの装置は今後開発が望まれる。当面は、電光表示板の代わりとしての表示形態も検討したい。

12 試合開始前のセレモニーは世界選手権を含め、各大会で若干の違いは報告されているが、原則として国際基準を取り入れたい。従来から各種の入場方法の中でレフェリー先導で入場することは実施してきた。一例としてレフェリーが先導しプレーヤーが後に続く方式、レフェリーが先にコート中央に位置して一斉もしくは一人一人ベンチから入場する方式等、試合開始時間との関係もあることから大会によって方法は自由とする。

日本選手権では大会後半に下記の方法を取り入れたい。まず日本協会旗が入場し、正面席に位置する。選手入場はAチームがレフェリー先導によりコート中央に行進、整列する。世界選手権ではレフェリーの次に国旗、日本選手権ではチーム名表示プラカード、その次に背番号順にプレーヤーと続く。チームAは自コートで整列し、BチームはAチームとハイタッチしながら反対側の自コートに整列する。関係者の紹介順は最初はチームキャプテン、以下背番号順に選手、チームスタッフと続く。両チームが終了した後、JHAオフィシャル、両TD、レフェリーの順とする。

世界選手権における国歌演奏は、各チームの先頭に位置する国旗に対して儀礼をしていた。

13 閉会式等セレモニーは平成27年10月に愛知県で開催したリオ・オリンピックアジア女子予選で実施した表彰式、閉会式手順が国際基準であったことから、日本選手権では原則この方式を導入する。優勝チームを含めチーム全員が登壇できる優勝チーム壇、2位、3位チーム壇を設営する。大会によっては平壇でもよい。各列の全面下部に、優勝、2位、3位であることを表示する大きめのプレートを置く。平壇の場合は、カーペットを引くことで華やかさは演出できる。

女子の世界選手権では表彰式および閉会式準備の間、生ライブ演奏を実施した。

入場は参加国旗、先導に続きIHF協会旗、各種トロフィー、メダルが入場がある。チーム団は2位表彰チーム側から入場すれば先頭は3位チーム、優勝チーム、3位チームとなる。このとき、チーム役員も一緒に入場する。優勝チームは表彰壇の後方に位置し、3位表彰、2位表彰を表彰壇の後ろで待つ。

その後、各プレゼンター6名の入場および紹介を行う。

最初に会長が挨拶をする。挨拶終了後、3位チームから整列した場所で順番に表彰メダルを授与する。プレゼンターは2名とし、メダル授与者および記念品授与者とする。メダル授与後、カップの贈呈となる。授与終了後、3位プレート前でプレゼンター及び選手と記念撮影を行う。2位表彰の後、優勝チームの表彰となる。

優勝チームの儀礼は会場に掲揚してある参加国の国旗とは別に、表彰として3チーム国の旗の掲揚が行われる。国内大会では表彰のためのチーム旗掲揚は行わない。

国内ではその他の表彰式典があるので、上記セレモニー進行を基準として、適宜その他の表彰式典を組み入れる。

優勝チームは表彰壇の後方に下がり、セレモニーが続く。世界選手権はオリンピック形式と同様に、IHF旗を開催国会長がIHF会長に手渡し、その後次回開催国会長に手渡し3名が退場してセレモニーは終了する。

撮影はTVカメラ、主催者カメラを除き、撮影区画の制限をする。

14 主催者席および会場正面として、女子世界選手権ではベンチ後方最上席をIHF・VIP席としていた。試合開始前の挨拶は記録席前にIHF旗が置かれ、プレーヤー・レフェリーはベンチ後方の主催者席を正面として整列した。カタールの男子世界選手権ではこれとは逆に整列していた。本協会は今後本協会役員および来賓が座る席を主催者席と呼称し、この席のある方向を正面とする。原則として記録席側とする。日本選手権ではこの配置を元に運営する。

15 主たるテレビカメラ群として、女子の世界選手権では会場正面上部に設置されていた。ヨーロッパハンドボール連盟のマニュアルではカメラ設置席はベンチ側上部とされている。

16 最近の他競技では広告ボードは電光表示となっている。また、フロアだけでなく、観客席にある壁面を利用した広告ボードも設置されている。将来的にこの設営ができるように検討する。広告ボードは正面席からボードが見える配置とする。正面席側にテレビカ

メラが設置されることから、必然的にテレビ画面に広告ボードが映り込むこととなる。世界選手権はフロアに設置する広告ボードは電光表示板であることから、コート側だけが掲示される。

17 レフェリーが認めていない得点に関する措置について、平成26年度末に開催された第38回全国高等学校ハンドボール選抜大会の顛末および今後の対応について、改めて整理する。

レフェリーが認めていない得点に関して、記録席役員が誤って加点した得点に関しては試合終了後であっても修正しなければならない。特に、勝敗に関する場合は再試合を含めて早期に解決するよう対応する。

当該事例でいえば、レフェリーが認めていない不適切な得点記録を修正する最終確認が行われた時点は試合終了時である。修正した結果は明らかに勝敗に関連する同点ということであったことから、次の試合を開始せずに、速やかに延長戦を行うべきであった。次の試合が始まったとしても、不適切な得点管理が判明しその結果勝敗がつかない場合は、当日中、もしくは翌日にその状況から再開する必要があった。

18 レフェリーが認めた得点の試合中の得点表示の誤り、もしくは退場者の排除が適切に行われなかった事例等は、原則として試合中の得点の修正、試合中の退場処置は必要であるが、前項の再試合の対象とならない。昨年度の平成27年4月1日付けの競技本部長通知により、平成27年度各大会において適切に競技運営がなされるよう通知により指示をした。このことは平成28年度も継続する。

1) 従来通り、競技運営中不適切な処置が発現された場合は、そこまでの競技結果(得点、罰則等)は成立させ、明らかになった時点から適切な処置を行った上で競技を再開するという処置を再確認する。例えば、退場になった選手が何らかの理由から退場せずに競技に出場し得点をあげていたことが判明した場合、退場しなればならなかった事実が明らかになった時点で退場とし、それまでの得点等は記録として成立させるということである。なお、この場合の責任はレフェリー、TD、JHAオフィシャルにあることから、選手にそれ以上の罰則を付加しない。

2) レフェリーは得点となったこと、得点でないことを明らかなジェスチャー等で表現し、記録席及び観客にわかるよう表現する。TD、記録席員は得点があったときはレフェリーと相互に確認し合う。レフェリーは得点を管理しておかなければならない。

当該事例でいえば、着地、ラインクロスの判定は得点と間違いやすいことから、レフェリーは大きなジェスチャーをすることが必要であり、誤って得点が加算されないよう得点掲示に配慮する必要があった。

3) 得点となったときの記録用紙(ランニングスコア)の書き方の再確認を行う。得点の合図があったときは得点をあげた選手の背番号を記入し、累積の得点を記入する。その後、スローオフの笛の合図によって得点の時間を記入することで得点が確定する。ゴールに入ったときの時間を記入することが慌てることによるミスを起こすことにつながり、正しい記録の記入の仕方でない。TD(スコアラー)は補助員の作業を注意深く指導する必要がある。記録席では試合終了後に新公式記録用紙に記録されることから、記録用紙もし

くは補助用紙に記録し、最終的に照合して記録用紙に記入することとなる。世界選手権ではTDの業務である。

19 JHAオフィシャルおよびTDの任務、平成28年度版を発行した。平成27年度版は「TDの任務」としたが、今年度は主催者オフィシャルとしての位置づけを確立させJHAオフィシャルという語句を挿入した。

(1) 主催者オフィシャルとしてのJHAオフィシャル及びTDの任務を確認し、適切な競技運営がなされることが求められることを強調した。

(2) 事実判定を除いた異議申し立てについては、真摯に対応し、適切に判断する。チームからの異議申し立てができる時間を、試合終了後1時間以内とする。

異議申し立ての有無にかかわらず、必要があれば裁定委員会を開催し、原則としてその場、もしくは当日中に判断、その後の対応を決定する。

国際連盟では、試合終了後1時間以内に500スイスフラン(平成28年3月現在のレートは約57,000円である。)を添えて抗議(異議申し立て)をすることができる。また、2時間以内に異議申し立て書の提出が義務づけられている。裁定委員会で審議し、試合終了後5時間以内に決定を行う。

裁定委員会の決定に不服がある場合は、通知書を受理してから2時間以内に1500スイスフラン(平成28年3月現在のレートは約171,000円である。)を納付し上告することができる。審議の上、4時間以内に最終決定を行う。この決定は最終のものである。

いずれの場合も申請が却下された場合は提出した納付金は没収となる。

平成28年4月の時点では納付金を義務としないが、しかるべき時期に金額を決定する。

(3) 平成20年度から裁定委員会は選手、チーム役員、レフェリー、大会関係者による重大な過失を伴う行為、処置も対象としてきた。

20 JHAオフィシャルおよびTDの服装について

JHAオフィシャルおよびTDとして統一したブレザー等の服装またはスポーツウェアを着用する。

21 競技中に外傷等が発生した場合についての措置

出血を認める場合はコート内に留まることは許されない。レフェリーが交代地域に行くことを指示する。止血の確認がなされた後、競技参加が可能となる。骨折、脱臼といった整形外科的外傷、脳震盪、心臓震盪、その他競技に出場することで選手の健康が明らかに阻害されると判断できる場合は、医師、専門家の判断を参考にして、チームの判断で出場の可否を決定する。誰が見ても明らかに競技することが適切でないとは判断される場合は、競技に参加することができない。

22 感染症対策は、大会本部だけではなく、各チーム、関係者の協力を得て防疫体制を整えとともに、感染防止の知識の普及及び意識の啓発を図る。健康上異常があるとき、または異常があると疑われるときには出場可否に関する判断は大会本部が行うものとする。

併せて、熱中症対策に十分に配慮すること。試合中、練習中はもとより、大会期間中、水分を十分にとるようにして、体調管理に十分配慮すること。

23 レフェリー・TD・JHAオフィシャルの間で通信機器の使用を積極的に推進する。通信機器は公的な電波を利用することから、短時間の交信で、的確に行う。交信の内容として、事実判定に関する指摘は避けなければならない。JHAオフィシャル、TDは、レフェリーが見ることのできなかつた失格相当の違反を助言することができる。

24 本協会競技委員長、本協会審判長は競技運営を円滑に推進するため、また、レフェリー育成のため、記録席または別の場所から通信機器を用い、レフェリーに各種のアドバイスをすることができる。

25 ユニホームは自分のチームを含めて、はっきりとコートプレーヤー、ゴールキーパーと区別できる色を用いなければならない。競技本部として、白一色を用意することを推奨する。ユニホームに高さ20cm以上の背番号、高さ10cm以上の胸番号をつけなければならない。背中に名前を入れる場合は、高さ10cm以内とする。ユニホーム、短パンツ、ソックスに表記されるメーカーロゴの大きさは、IHFが規定している20cm²を超えてはならない。

平成27年度に実施したジャパンオープントーナメント、国体、日本選手権では厳格に対応し、規則に合致していないユニホーム等については使用を禁止した。この措置により、各チームは指摘を受けた後それぞれ規則に合致するよう対応し、規則に合致したユニホームのみが試合に使用することを許可した。

26 相手チームのコートプレーヤーとチーム役員のウェアの色が同色であってはならない。試合前のユニホームの確認時、試合前のウォームアップ時にJHAオフィシャル、TD、レフェリーは気がつかなければならない。試合中であっても違う色のウェアに変えなければならない。女子の世界選手権ではチーム役員がピブスを着用していた。

27 試合中、交代地域にスペースがあればウォーミングアップをすることができる。ウォーミングアップを中断するようであれば、直ちに座るよう指示をする。ウォーミングアップ中にコート内に向かって指示を出すようなとき、試合の判定に反応して声の大小にかかわることなく、もしくはジェスチャーをしたときは、直ちに座るよう指示をする。状況によってはスポーツマンシップに反する行為として、レフェリーを呼び、罰則を適用させる。

28 チームタイムアウト請求カード(グリーンカード)は、チーム役員が記録席の机の上に置かなければならないとしていたが、コーチングゾーンを越えた場合、速やかに提出しなければならないことから、TDは手で受け取ってよいこととする。なお、チーム役員が不在の場合は、チームタイムアウトを請求できない。グリーンカードはチームタイムアウトを請求するときだけ、手に持つことができる。グリーンカードをもってコ

ーチングゾーンを越えたときは、躊躇することは許されない。ブザー等で競技が中断し、レフェリーの合図の後、50秒が計測される。50秒の合図があった後、1分で競技を再開するようしなければならない。TDおよびレフェリーは試合を速やかに再開しなければならない。

29 交代地域では、チーム役員、選手のあらゆる通信機器の使用を禁止する。試合の記録媒体として通信機能があると思われる電子機器の情報端末の使用も禁止する。男子の世界選手権で韓国のコーチがi-padを使用したという報告があるが、世界選手権の他の試合ではその事実を見ることはなかった。先般来、IHFに問い合わせをしているが未だ回答がない状態である。通信機器ではないが、メガホンの使用を禁止する。

30 試合中、選手、レフェリー及び関係者にレーザーポインターの照射が認められたとき、IHFでは下記のように対応していることから、本協会でも同様の手続きを行う。照射に気がついた関係者がJHAオフィシャルに報告し、会場アナウンサーを通じて照射をやめさせるよう放送をする。照射が行われるようであれば、選手他の健康を考慮して無観客試合とすることもあり得ることを放送する。

31 ゴール等の競技用具の事故防止等の安全管理に、さらなる配慮をする。近年、学校等でのゴールの転倒または損壊等による人身事故の報告はないが、設置責任者のみならず使用者責任として安全管理には特段の配慮を求める。

以上